



Title	「こころ」の理解考：「むね」との比較を通じて
Author(s)	後藤, 秀貴
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2020, 2019, p. 43-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77040
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「こころ」の理解考 — 「むね」との比較を通じて — *

博士後期課程3年 後藤 秀貴

1 はじめに

- (1) 御諸 (みもろ) の 其 (そ) の高城 (たかき) なる 大猪子 (おおみこ) が原 (はら) 腹 (はら) にある 肝向 (きもむか) ふ 許々呂 (こころ) をだにか 相思 (あひおも) はずあらむ
(古事記 712 下・歌謡) ¹

日本語において、ヒトの非物理的な活動を司り、肉体とは区別される存在を指す語は複数存在するが、その代表に位置付けられるのは「こころ (心)」であろう²。しかし、「こころ」は元々心臓 (のあたり) を指す語でもあった。例えば (1) に挙げた歌では、「こころ」は「はら (腹)」の中にあり「きも (肝)」と向かい合う存在として、また「相思ふ」存在・対象として描かれている。この用例では、「こころ」は実体のある身体部位を指す反面、最終句によって抽象的な精神との結びつきを与えられており、多義的である³。本稿では、こうした歴史的背景を持つ日本語の「こころ」の比喩的理解について、認知言語学的観点から特徴づけを行う。「こころ」を扱った先行研究は複数存在するが、身体部位としての「こころ」の歴史的背景を考慮したものは少ない。一部の研究では「こころ」と「むね (胸)」の互換性が指摘されているが、両者の共通性・相違性を詳細に扱った研究は存在しない。そこで本稿では、「むね」を中心とした身体部位との比較を通じて、「からだことば」としての「こころ」の側面を探るとともに、「むね」あるいはその他の部位では見られない「こころ」の比喩的理解の特徴についても明らかにしたい。

論文の構成は次の通りである。2 節では、「こころ」に関する先行研究を概観した上で本研究の課題を示す。3 節にて「こころ」の語源と形態について整理したのち、4 節では、筆者の「むね」および隣接部位に関するこれまでの研究を参照しながら、「こころ」とそれらの部位を比較観察する。5 節では観察結果をもとに「こころ」の身体性・固有性について考察を加え、6 節で結論づける。

2 先行研究と課題提起

認知言語学的立場から日本語の「こころ」を論じた研究として、方 (2010)、鷺見 (2010)、松井 (2016) が挙げられる。方 (2010) は、日本語の「心 (こころ)」と中国語の「心 (xin)」の比較を行い、〈心は容器である〉〈心は水平面である〉〈心はモノである〉という日中共通の概念メタファー (conceptual metaphor) の存在を明らかにした上で、表現レベルでの多様性には差異も見られることを論じている⁴。鷺見 (2010) は、日本語の歌詞の観察に基づき、「こころ」が「存在物」「容器」「物理的空間」に喩えられていることを指摘し、さらに「存在物」の具体レベルとして「身体とは別個の物体」「脆い物体」「燃える物体」を、「容器」の具体レベルとして「収蔵庫」「家屋」を、「物理的空間」の具体レベルとして「空」「大地」を挙げている。松井 (2016) は、これら 2 つの研究を参照した上で、辞書やコーパスから得られた表現をもとに、「こころ」のメタファーを (2)-(4) の通り拡充・整理している。方 (2010)、鷺見 (2010) が挙げた「モノ」「存在物」としてのメタファーが (2)-(4) に含まれていないのは、「存在のメタファー (ontological metaphor)」(Lakoff and

* 本稿の執筆にあたり、同大学院の友繁有輝氏には様々なご意見を賜った。お礼申し上げる。

¹ 古典の引用においては、キーワード ((1) では「こころ」) のみ原典の表記に即し、下線を施す。

² 本稿では、「こころ (心)」や「むね (胸)」などの和語はかな表記とし、初出の箇所のみ現代語において一般的に使用される漢字を併記する。ただし、引用部分はそれに限らない。

ところで、「こころ」以外の候補としては「精神」が挙げられるが、こちらはいうまでもなく漢語である。中国医学の三宝 (精・気・神) のうち二つを組み合わせでできた語であり、文明開化時にドイツ語の Geist などに対する訳語として充てられたことで現在の「物質」の対義語としての地位を獲得した (三浦 2006)。三浦 (2006) によれば、「精神」はすでに明治 17 年 (1864 年) 刊行の学術訳語辞典に登場しているという。

³ 「身体部位 (body part)」はしばしば「はら」「むね」「あたま」などの外的部位を指し、「心臓」や「肺」などの臓器 (内臓) とは区別されるが、本稿では便宜上、両方を指す広義の意味で用いる。

⁴ 概念メタファーは山括弧内で示す。

Johnson 1980) 自体が「こころ」の比喩的理解を実現する上位メタファーであり、(2)-(4) は全て「存在のメタファー」の下位メタファーとして機能しているからである (松井 2016)。

- (2) a. 〈心は視覚的特徴を持つ物体〉 b. 〈心は聴覚的特徴を持つ物体〉 c. 〈心は触覚的特徴を持つ物体〉 d. 〈心は味覚的特徴を持つ物体〉 e. 〈心は嗅覚的特徴を持つ物体〉
(3) a. 〈心は容器〉 b. 〈心は建物〉 c. 〈心は人〉
(4) a. 〈心は大気〉 b. 〈心は水〉 c. 〈心は像が現れる平面〉 d. 〈心はスクリーン〉

方 (2010)、鷲見 (2010)、松井 (2016) の研究は全て「こころ」が抽象概念であることを前提としており、それがどのような具体概念を通じて理解されるのかを明らかにしている。つまり、これらの研究では「こころ」は概念メタファー理論 (Conceptual Metaphor Theory) (e.g. Lakoff and Johnson 1980, 1999) における目標領域 (target domain) に置かれており、注目されるのは「存在物」「容器」などの起点領域 (source domain) の種類である。

もっとも、現代日本語の「こころ」は抽象概念を指す語であり、その意味において先行研究の方針に異論はない。しかし上述のように、「こころ」は本来身体に根ざした語であり、「はら」「むね」「あたま (頭)」のような部位と同様に何らかの「からだことば」としての特徴を有しているはずである。このような身体部位としての「こころ」の一面を考慮した研究として、Ikegami (2008)、Occhi (2008)、後藤 (2017) が挙げられる。Ikegami (2008) は、「こころ」が本来精神のみならず臓器を指していた歴史的背景をもとに、内臓すなわち心臓としての「こころ」と外的部位としての「むね」の隣接関係を認め、両者の比喩表現に互換性が見られることを指摘している (e.g. 「[こころ/むね] が躍る」)。Occhi (2008) は、日本語の HEART の文化モデルを構成する中心的存在は「こころ」である一方で、「むね」が容器としてメトニミー的に結びつくことを指摘することで、身体部位としての「こころ」と「むね」の関係性を間接的に示唆している。また、筆者の拙論 (後藤 2017) では、日英語の胸部の比喩的理解の共通性・相違性を分析するにあたり、「むね」と heart を比較したが、その中で「具象物」ではあるが「容器」メタファーとは言い難い一部の表現では、日本語の場合「むね」ではなく「こころ」にのみ表現が認められることを述べた (e.g. 「こころを入れ替える」「こころを配る」)。

Ikegami (2008)、Occhi (2008)、後藤 (2017) の研究は、身体部位としての「こころ」と「むね」の共通性あるいは相違性を示唆しているものの、いずれも詳細な観察・分析にまでは至っておらず精査の余地がある。そこで本稿では、以下2点をリサーチ・クエスチョンとし、日本語の「こころ」の比喩的理解について再検討する。

- 精神作用を表す「こころ」ならびに「むね」の比喩表現の共通性・相違性は何か。また、「こころ」にはその他の身体部位との接点は見られるか。
- 「こころ」の比喩的理解には身体部位としての基盤が存在するか。一方で、その他の身体部位では見られない「こころ」の固有性は見られるか。

3 「こころ」の語源と古代日本語における使用

具体的な表現の観察を始める前に、「こころ」の心臓および精神の意味について歴史的観点から整理しておきたい。和語としての「こころ」の語源についてはこれまでに様々な説が提案されているが、諸説をまとめると以下の4つに大別することができる⁵。

- (5) ① ばらばらになっていた同質のものが寄り集まって固まることを表す語 (句) から生じたとする説。「こりこり (凝凝)」「ころころ (凝々)」「こごる (凝)」など。
② 指示代名詞や場所を指す語をもととするという説。「ここ」を爰、「ろ」を所とするなど。
③ 心音と関連付けた説。「こつこつ」など。
④ 表に対して外に表れない内部を指す「こころ (裏)」の義。

⁵ 参考辞書：『暮らしのことは新語源辞典』『古典基礎語辞典』『日本国語大辞典 第二版』『日本語源大辞典』『日本語源広辞典 増補版』

①は「こころ」を「凝る」と同語源として捉えるもので、最も周知された説である。身体の中にある形の定まらないものが凝り固まった結果、「こころ」が出来上がったとされる。ただし、この説では凝り固まったものが心臓を指していたのかまでは定かではない。また、④の説は「裏」の意味での「こころ」を語源とする説である。現代日本語でも、外面に現れない内部の意を指して「うら（心）」と言うが、これも「うら（裏）」と同語源とされる。

このように、「こころ」の心臓ないし精神との結びつきは、語源的には③や④に関連を見出すことができるものの、定かではない。しかし(1)のように、「こころ」は確かに上代から臓器の意味、精神の意味で用いられる語であった。(1)のほかにも、臓器・精神の意味を意図した「こころ」の用例として(6)が挙げられる。「村肝(むらきも／むらぎも)」は「群肝」とも書かれ、「肝向ふ」と同様に「こころ」にかかる枕詞である。解釈については諸説あるものの、「群がっている肝あるいは臓腑」のことを指し、そこに存在する臓器あるいは精神としての「こころ」を指したと言われている。

(6) 村肝之(むらぎもの) 情(こころ) 碎(くだ)けて かくばかり 我(あ)が恋ふらくを 知らずかあるらむ (万葉集 8C 後 四・七二〇)

「こころ」は万葉集でも多くの歌の中で詠まれ、池添(2013)の調査によればその使用数は286にも及ぶ。[表1]の通り、使用数の合計からいえば、万葉集においては万葉仮名による表記「許己呂」「己許呂」よりも訓による表記「情」「心」「意」「神」「景迹」が多い。言うまでもなく「心」は心臓を象った文字であり、当時の「こころ」が心臓を指す文字に対して訓まれたことは、「こころ」の心臓との結びつきを部分的に保証していると言ってよいだろう。ただし、中国語の「心」はあくまで中国医学における五臓(五藏)の一つのことをいい、単に西洋医学でいう心臓、すなわち循環器系の中核としての心臓を指しているわけではなかった。中国医学における「心」は、五臓六腑を統制し、ヒトの生理作用ならびに精神作用を司る身体の中核であり、そこに蔵される精神(作用)の主宰は「神」と呼ばれる(三浦1996, Yu 2008)⁶。万葉集において「こころ」が「情」「意」「神」に対しても訓まれていることから分かるように、「こころ」という語は、既に上代において精神の意味を中心に成り立っていたと考えられる⁷。

一字	情118、心117、意13、神3
二字	景迹1
三字	許己呂22、己許呂12
合計286	

表1. 万葉集における「こころ」の表記とその使用数(池添2013)の調査に基づく)

4 「こころ」の比喩表現再考 — 「むね」との比較をもとに —

4.1 観察の方針と方法

前節では、「こころ」は上代において臓器を指して用いられていた反面、既に精神的な意味を中心に成り立っていたと考えられることをみた。また[注6]でも触れたが、宮地(1979)によれば、「こころ」の臓

⁶ 例えば中古の辞書『倭名類聚抄』では「心火之精也色赤」、『伊呂波字類抄』では「五藏心也火藏也」とある。

ところで、「こころ」を含む心臓を指す語の変遷については、宮地(1979)に詳しい。宮地によれば、「こころ」は上代において(1)のような文脈の中で心臓(のあたり)を指す用例が見られるが、それは精神が宿る場所という見方に支えられてのことであったと考えられ、そのような臓器としての「こころ」の使用も、すでに中古から漢文訓読文や辞書類の中に限定されていった。そして、中国医学の影響により五臓(「五藏」とも書く)の一つとしての「心」の存在が知識として伝えられるが、その際の語形としては「シン(心)」「シンゾウ(心臓)」が用いられ、遅れて「シンノゾウ(心の臓)」が加わった。これらの語は、江戸時代に西洋医学のheartの訳語としても用いられることで、いわゆる解剖学的な心臓としての意味を強めていった。うち、中世の或る時期から明治初期までは「シンノゾウ(心の臓)」が一般的に用いられ、明治中期からは「シンゾウ(心臓)」へと移った。

⁷ 万葉集における「こころ」の正訓の使い分けについては板垣(1988)を参照。板垣によれば、万葉集においては、一部の歌人で自身の「こころ」を表すか否かによって「心」と「情」を書き分ける傾向が見られる。なお、日本書紀や古事記では字義に基づいた書き分けが確認され、「意」が理性的・論理的側面を(日本書紀のみ)、「情」は非論理的・感情的側面を、「心」は心理作用全般を表す傾向にあるという。

器としての意味は、すでに中古においては使用の場が限定されつつあったようである。しかしながら、先行研究の示唆するように、「こころ」の表現には依然として身体部位としての「こころ」の側面が残存している。本節では、他部位との比較を通じて「こころ」の身体性を探るとともに、一方で、「こころ」の理解の特殊性についても考察する。

Ikegami (2008) が指摘するように、心臓と胸は身体の構造上隣接関係にあり、したがって「こころ」の比喩的理解を支える心臓としての身体基盤は、「むね」のそれと重なる部分があるはずである。本稿では、「こころ」の身体基盤を見出す手がかりとして「むね」を比較対象の基本とする。「こころ」「むね」の表現は原則として『日本国語大辞典 第二版』から収集し、分類は後藤 (2017, 近刊) を参考とした。「むね」の表現は二種類に大別され、一つは生理感覚・反応に基づくと考えられるメトニミー表現・メタファー表現 (e.g. 「むねが高鳴る」「むねが躍る」「むねが苦しい」「むねが塞がる」)、もう一つは特定の生理感覚・反応との関連を見出し難いメタファー表現 (e.g. 「むね算用」「むねに納める」) である。筆者はこれまでの研究で、「むね」は身体部位の中でも特に生理感覚・反応との結びつきが強く、それゆえ前者のタイプの表現が豊富に存在することを論じてきた (e.g. 後藤 2015, 2017, 近刊)。本節ではまず前者のタイプに関して「むね」と「こころ」の互換性を観察し、のちに後者のタイプについて比較を行う。その際、後藤 (2017) で部分的に行った「こころ」のメタファーの観察を参考にしつつ、分析を拡充していく。

なお、2節で概観したように、「こころ」を目標領域に置いたメタファー分析では、起点領域の特定・分類を重視する傾向にあり、当該表現全体としての精神作用に関する意味は十分に考慮されていない。本稿では、①「むね」などの他部位との比較を試みること、② 表現の分類においてそれらが最終的に伝達する精神作用を考慮に含めること、③ 先行研究の間でも起点領域の分類が統一されていないことの3点を理由に、いずれかの先行研究の分類に従うことはせず、適宜必要に応じて参照することとする。

また、日本語の歴史において、訓が固定されるまでは漢字と和語 (訓み) の対応は現代語よりも遥かに多様性を有していたことは周知の通りであるが (大島 2006)、「こころ」「むね」についてもその通りで、例えば『類聚名義抄』ではこれらに「心」と「胸 (匈)」両方の漢字を充てている。しかしながら、「腸」「腸」についても「こころ」と訓んでいることを考慮すると、「こころ」は広く内臓と結び付けられていたとも考えられる。本稿ではこのような背景から、「こころ」の比較対象として「むね」を中心に据えつつ、必要に応じてその他の身体部位にも触れる。

4.2 身体経験 (感覚・反応) に基づくと考えられる表現

以後、「むね」の表現との互換性を手掛かりに、「こころ」の身体基盤について検討していく。互換性の判断については、「こころ」ないし「むね」を含むある表現が共通の語 (句) を構成要素に持つか否かを基準とするが、各表現は『日本国語大辞典 第二版』における (小) 見出しの形をそのまま用いるため、歴史的な文法形態によるものや自動詞・他動詞の使用が統一されていないものも存在する。本稿ではこのような相違は考慮に含めない。さらに本節では互換性を広く捉え、同一の語でなくても類似する意味を表す語 (句) を用いた表現が存在する場合、併せて取り上げる。

後藤 (近刊) では、精神作用と結びつく「むね」の身体経験として「痛み」「閉塞感 (苦しさ)」「動悸」「体温変化」「不快感」の5つを挙げ、またそれらの誇張形として「刺激」「閉塞・圧迫・破裂」「動揺」「燃焼」が存在することを述べた。「こころ」の表現のうち、「むね」との互換性が確認される表現を (7)-(11) に挙げる。比較のため、対応する「むね」表現を通し番号内のbで示した。また、句全体を字義通りに解釈した場合の意味と精神作用としての典型的意味を山括弧内で示し、矢印で結んだ。

- (7) 〈痛み・刺激〉→〈悲しみ〉
 - a. こころ痛し、こころを刺す
 - b. むね痛し、むねを刺す、むねに釘打つ
- (8) 〈閉塞 (感)・圧迫・破裂〉→〈悲しみ・不安・感情の高ぶり (感動)〉
 - a. こころ苦し、こころに咽す、こころを潰す
 - b. むね苦し、むねが潰れる、むねがはり裂ける、むねがつかえる、むねがつまる
- (9) 〈動悸・動揺〉→〈期待・不安〉
 - a. こころ騒ぐ、こころが躍る、こころが弾む、こころときめく

- b. むね走る、むねが騒ぐ、むねが躍る、むねが弾む、むねをときめかす
- (10) 〈体温変化・燃焼〉→〈苦悶・恋慕・恐怖〉
 - a. こころを焦がす、こころ燃ゆ、こころ焼く、こころ寒し
 - b. むね焦がる、むねを燃やす、むねを焼く、むねを冷やす
- (11) 〈不快感〉→〈嫌悪〉
 - a. こころが悪い
 - b. むねが悪い

メタファーレベルで観察した場合、上の表現群には「こころ」や「むね」を「脆い物体」や「燃える物体」(鷺見 2010)として捉え(e.g.「こころを潰す」「こころ燃ゆ」)、「人」(松井 2016)として擬人化し(e.g.「こころが躍る」)、また、「容器」(方 2010, 鷺見 2010, 松井 2016)とみなしたもの(e.g.「むね塞がる」)が混在しているように見えよう⁸。しかし、これらはいずれも特定の生理感覚・反応がメトニミーやメタファーによって感情と結びついた表現として分析可能であり、特に急激で強い情動を表す傾向にある。各表現をみると、(7)は痛覚を辛く悲しい感情状態と結びつけた表現、(8)は閉塞感(部分的に痛覚)を、悲しみや不安といったネガティブな感情に圧倒され、耐えかねる様子、あるいは感動などで感極まる様子と結びつけた表現、(9)は鼓動を通じて想起される興奮状態を期待や不安などの情緒不安定な状態と結びつけた表現、(10)は体温変化を苦悶、特に恋慕による感情の激しさ・それによる精神的消耗、または恐怖と結びつけた表現、(11)はむかつきなどの生理的不快感を嫌悪感と結びつけた表現である⁹。このように、「むね」と隣接関係にある心臓としての「こころ」は、後藤(近刊)で示した「むね」の身体経験をかなりの程度で共有していると考えられる。なお、感覚を表す語「痛い(痛し)」「苦しい(苦し)」を用いた「こころが痛い(こころ痛し)」「こころ苦しい(こころ苦し)」などは現代でも一般的に用いられる表現であるが、既に上代で用例が確認され(以下、用例の初出年代について言及する場合は全て『日本国語大辞典 第二版』を典拠としている)、こうした語との結びつきはまさに「こころ」の身体性を支持するものである。

一方で、より詳細に観察すると、両者の間には相違性も認められる。痛覚に由来すると考えられる(7)の表現群に関して、「こころ」と頻繁に結びつくが「むね」とは結び付かない語として「砕く」がある。「きもを砕く」という表現が存在するように、砕ける「こころ」は内臓としての一固体としての意識が強いのではなかろうか¹⁰。また、(8)の閉塞感から派生したと考えられるメタファー表現については、「こころ」よりも「むね」を用いる場合が多いと考えられる。『日本国語大辞典 第二版』では、「むね」の閉塞感と関連するメタファー表現として、(8)で挙げたもののほかにも「塞がる」「拉ぐ」などの表現を載せているのに対し、「こころ」は「潰す」のみである。「こころを潰す」についても、『日本国語大辞典 第二版』での釈義では「心を砕く」とあるだけで、閉塞感を圧迫感として誇張した表現とは言い難い。「きもを潰す」という表現が存在することを考えると、「砕く」と同様に、「潰す」の表現は内臓としての「こころ」の損傷に焦点を当てたものとも考えられる。

ちなみに、(8)で挙げた「むね」表現のうち、「はり裂ける」「つかえる」「つまる」については『日本国語大辞典 第二版』で「こころ」に対応表現の記載がないが、現代では用いられることもあるだろう。しかし、『筑波ウェブコーパス』での以下の調査結果が示すように、語同士の共起関係の強さを測るLD(LogDice)は、いずれも「胸」が「心」を凌いでいる。

⁸ 鷺見(2010)では、「脆い物体」としての「こころ」について、「壊れる」「折れる」「かけら」などとの結びつきを歌詞から引いている。

⁹ (10)は胸部に固有の身体経験とは言い難いが、例えば後藤(近刊)で挙げたように、万葉集では恋心を歌って「胸を熱み」(一二・三〇三四)とある。

¹⁰ 「(心胆/心肝/肝胆)を砕く」ともいい、中国語では「心胆俱裂」で恐怖や驚きを表す。また、「はらわた(腸)」でも、「はらわたがちぎれる」(中国の故事由来で「はらわたを断つ」「断腸」とも)という表現がある。「はら」に関連する内臓の表現を扱った研究としてはGoto(2017)を参照。

ちなみに、「砕ける」「砕く」に関して[表2]と同様に『筑波ウェブコーパス』の用例を検索すると、「むね」でもそれぞれ1件、2件(うち、1件は身体の負傷を指すもので精神作用とは無関係)の共起事例が得られる(「こころ」はそれぞれ11件、516件)。「むね」は事例として全く存在しないとはいえないものの、「こころ」と比べて圧倒的に少ない。

コロケーション	頻度	MI スコア	LD ¹¹
心が {張り裂ける}	46	8.34	1.7
胸が {張り裂ける}	257	13.6	6.96
心が {つかえる}	2	3.53	-2.82
胸が {つかえる}	26	10.01	3.65
心が {詰まる}	32	2.63	1.14
胸が {詰まる}	338	8.80	7.11

表2. 「...が張り裂ける」「...がつかえる」「...が詰まる」の「心」および「胸」とのコロケーション情報
(検索には NINJAL-LWP for TWC を利用)

4.3 「容器」としての「こころ」

ここからは、特定の生理感覚・反応との関連を見出し難いメタファー表現のうち、「こころ」や「むね」を「容器」とみなす表現を観察していく。ここで「特定の生理感覚・反応との関連を見出し難い」というのは、感情との共起関係（時間的隣接関係）にある身体経験を想定し難いことを意味し、身体基盤の存在自体を否定する訳ではない。実際のところ、身体は食物摂取、呼吸によって本質的に「容器」としての性質を備えており（Johnson 1987）、胸部はそれらの生命維持活動に関わる臓器を内包する部位である。また、心臓についても血液との関係性を考慮した場合、「容器」であるとも言えるだろう。

先述の通り、「こころ」は精神を収める「容器」として理解されているが、鷺見（2010）、松井（2016）の指摘するように、それを支えるのは「容器（container）」のイメージ・スキーマが持つ（12）の特徴である¹²。

- (12) ① 容器の境界線によって「内側」と「外側」という領域ができる。
- ② 容器の外側から内側へ、あるいは内側から外側へ、内容物（content）を出し入れする。
- ③ 容器も内容物も、ともに「物体」である。

（谷口 2003: 26–27）

(12) の特徴は「むね」にも当てはまり、以下のように「こころ」と「むね」の表現は極めて類似している。
(13) は、① の特徴である容器の境界線によって出来上がった内側を指すことで、そこに収まる精神内容をメトニミー的に指したものの、(14) は内容物の存在を述べたものの、(15) は ② の特徴のうち、外から内への内容物の取り込みを利用したものである。

- (13) 〈内部〉→〈本心〉
 - a. こころのうち、こころの底、こころの奥
 - b. むねのうち、むね底
- (14) 〈内容物〉→〈考え・意図〉
 - a. こころにあり
 - b. むねにある
- (15) 〈取り込み〉→〈理解・納得〉
 - a. こころに落ちる
 - b. むねに落ちる

また、① と ② の特徴は、容器の規模が大きければ大きいほど大量の内容物を納められるという推論を導き、(16) のような度量の表現を生む。

- (16) 〈広さ〉→〈度量〉
 - a. こころが狭い、こころが広い
 - b. むねが狭い、むねが広い

¹¹ 「LD は LogDice 係数で、コロケーションの統計処理でよく利用されるダイス係数を対数化したものです。共起頻度、見出し語の頻度、共起語頻度の 3 つの変数から導いた統計値で、降順に並べると、MI スコアよりは単純頻度に近い結果が出ます。」（『NLT (NINJAL-LWP for TWC) ユーザマニュアル バージョン 1.30』 p.20）

¹² 松井（2016）は（12）をさらに拡充し、「容器には底がある」「容器には深さがある」「容器には奥行きがある」を加えている。

さらに (15) とは反対に、内から外への内容物の移動は精神内容の表出を表す。精神内容の積極的な表出を避ける傾向にある日本語では、「こころ」や「むね」の中にある本心を「納める（納む）」ことが重要となる (17)。

(17) 〈収容〉→〈本心を隠す〉

- a. こころに納む
- b. むねに納める

容器が開放されると、外からの内容物の認識が可能となることに加え、内容物が外へ出ていくことが可能となる。これにより、本心を包み隠さず他人と関わること、あるいは留まっていた想いが表出され、不安などの感情が解消されることの意味が導き出される。

(18) 〈開放〉→〈本心の公開・感情の解消〉

- a. こころ開く、こころを開く
- b. むねが開く、むねを開く

(13)–(18) には一般的にイメージされるコップなどの容器のみならず、閉鎖空間のような種類の「容器」が関与している。下位レベルでの細分化では、「収蔵庫」「家屋」(鷺見 2010)、「建物」(松井 2016) の他にも様々なラベリングが可能であろうが、重要な点としては、「容器」のイメージ・スキーマを通じた「こころ」「むね」のメタファー表現はどれも (12) の特徴に支えられているということである。

一方、Ikegami (2008) の指摘するように、日本語では身体が物体 (entity) としてではなく、場 (locus) としても理解される傾向にある。(19) の表現は「こころ」や「むね」を考え・意図を生むための精神活動の場とみなした表現であると考えられる。

(19) 〈計算〉→〈考え・意図〉

- a. こころ算用
- b. むね算用

また、場としての「こころ」の代表例が心情を「天候」に喩える表現である (cf 「空」(鷺見 2010)、「大気」(松井 2016))¹³。(20) の通り、天候のメタファーも「こころ」「むね」で共通するものが多い。

(20) 〈天候〉→〈不安 (の解消)〉

- a. こころ晴る、こころを晴らす、こころの霧、こころの雲
- b. むねが霽れる、むねを晴らす、むねの霧、むねの雲

以上のように、「こころ」と精神内容を別々に捉え、その関係性を問題とするメタファーは他にも存在するが、「むね」と共通するものを挙げておく。

(21) 〈銘記・浮上〉→〈記憶 (の想起)〉(cf 「水平面」(方 2010)、「水」(松井 2016))

- a. むねに刻む、むねに浮かぶ
- b. こころに刻む、こころに浮かぶ

最後に、「むね」と比べて「こころ」とは結びつきにくい語も存在する。4.2 節において、閉塞感から派生したと考えられる感情表現は「こころ」では「潰す」のみであると述べたが、以下の通り「容器」メタファーにおいても、内容物の増量とそれに伴う容器の膨張を表す表現は「むね」の方が豊富である¹⁴。(23) の表現を含め、情動面との結びつきは「こころ」よりも「むね」の方が強いと考えられる。

¹³ 精神作用を表す天候のメタファーについては松浦 (2017) に詳しい。「こころ」「むね」を含む表現の用例も挙げられており、それらの表現の動機付け・仕組みについて詳しく論じられている。

¹⁴ (22) は (8) の同類として分析可能であるが、(8) が閉塞・圧迫・破裂によって「こころ」「むね」が被害を被り、正常に機能しなくなることを問題とするのに対し、(22) は内容物としての感情の「量」を焦点化している。後者はより内容物を意識したものであると捉え、敢えて本小節で取り上げた。勿論、(8) において「こころ」や「むね」が「容器」的に捉えられていることを否定するものではない。

- (22) 〈一杯・膨張〉→〈感情の高ぶり・期待〉
 a. ところに余る
 b. むねに余る、むねが一杯になる、むねが膨らむ
- (23) 〈沸騰〉→〈怒り〉
 むねが煮える

4.4 「具象物」としての「ところ」

特定の生理感覚・反応との関連を見出し難いメタファー表現の中には、4.3 節で見た表現のように「ところ」や「むね」と精神内容を別個に捉えるのではなく、精神主体そのものとして理解するものが存在する。この種のメタファーでは、「具象物」(cf 「モノ」(方 2010)、「存在物」(鷲見 2010))あるいは下位レベルで「人」(松井 2016)としての「ところ」や「むね」の性質・状態(変化)・位置(変化)・動作などが精神作用と結び付けられる¹⁵。4.2 節、4.3 節での観察結果とは裏腹に、これらは「ところ」特有のものが多く、「むね」に相当表現が確認されるのは(24) (25)のみである。しかし、後藤(近刊)で報告したように、「むね汚し」は中古から、「むねを定める」は近世から用例が確認されるものの、現代ではその使用は稀であると考えられる¹⁶。現代日本語で一般的なのは、むしろ「はら汚し(はら汚い)」「はらを定める」「はらを据える」であり、(24) (25)は「ところ」と「むね」の互換性という枠内のみでは捉えられないだろう。

- (24) 〈清濁・善悪〉→〈性分〉
 a. ところ汚し、ところ濁る、ところ澄む、ところが悪い
 b. むね汚し、むねがいい、むねが悪い
- (25) 〈固定・決定〉→〈覚悟・決心〉
 a. ところを定める、ところを据える、ところを決す
 b. むねを定める、むねを据える、むねを極める

以後、「むね」にはない「ところ」特有の表現として、後藤(2017)のデータを拡充し、分析を改めたものを順に見ていく。まず、(26)のような「ところ」の有無を述べる表現は「ところ」がどのような精神作用を司るかを端的に示すものであり、現代では特に同情心や分別、情趣を解する力を表す(後藤 2017)。しかしそれだけではなく、(27)にあげる『日本国語大辞典 第二版』の「ところあり(心有)」の語釈により、「ところ」は知・情・意の全てを司る存在であることがわかる。

- (26) 〈存在〉→〈精神全般(知・情・意)〉
 ところあり、ところない
- (27) 「ところあり(心有)」
 ① 他に対してあたたかい気持をもつ。思いやりがある。厚意がある。
 ② 情理を解する。あたたかい気持で、もののすじ道を考える。
 ③ 思慮、分別がある。物の道理がわかる。良識をもつ。
 ④ 情趣を解する。風雅を解する。もののあわれを知る。
 ⑤ 風情を覚える。風雅である。風流である。
 ⑥ 各種の意図的な気持をもつ。
 (イ) 特定の相手以外の人を愛する気持をもつ。二心をもつ。異心(ことごころ)がある。
 (ロ) 下心がある。作意的な心がある。
 (ハ) 意趣を含む。ひそかに恨みや害心などをいどく。

(『日本国語大辞典 第二版』「ところあり(心有)」から抜粋)

¹⁵ 後藤(2017)では、本小節で取り上げる「ところ」の表現の多くを Niemeier(2000)で論じられた HEART の文化モデル *heart as a metonymy for the person* (人を表すメトニミーとしての *heart*) と対応付けたが、今回再検討した結果、Niemeier(2000)による表現の分類基準に不明瞭な部分が多く、筆者の解釈によって日本語と対応づけるべきではないと判断したこと、松井(2016)の「人」としての「ところ」のメタファーとの混同を避けるべきであることを理由に、ラベリングを改め、「具象物」とした。

¹⁶ この理由から、後藤(2017)では(24) (25)のような「むね」表現は取り上げなかった。また、「{ところ/むね}汚し」に関して、「汚い」のは「ところ」や「むね」ではなく、内容物であるといったメトニミー的分析も可能である。

「こころ」の知・情・意に関わる側面は、「具象物」としての「こころ」の「属性」(方 2010)を通じて焦点化され、(28)–(32) のような表現を生んでいる。(29)、(30) の属性は互いに類似しているように見えるが、それぞれ異なるメタファー的動機が働いているだろう。すなわち、長さは時間的な意味での「こころ」の持続性を利用したものであり、「こころ」が「長い」人物は情緒的な安定状態を長時間維持できる。一方、「きもが太い」とも言うように、「こころ」が「太い」人物は物理的・精神的に安定し、刺激に対して容易に動揺することがない (cf. (25))。これに似て、(31) は硬いものは手を加えにくく (変化させにくく)、柔らかいものは手を加えやすい (変化させやすい) という経験的知識が、推論を通じて精神的柔軟性と対応したものと考えられる。(32) は様々な解釈が考えられるが、後藤 (2017) で指摘したように、＜幸せは上・悲しいは下＞ (HAPPY IS UP / SAD IS DOWN) (Lakoff and Johnson 1980) のメタファーが介入したものであろう¹⁷。

- (28) 〈量〉→〈思慮・注意〉
こころ足る、こころ少なし
- (29) 〈長さ〉→〈忍耐力〉
こころ長い、こころ短し
- (30) 〈幅〉→〈胆力 (不安)〉
こころ太し、こころ細し
- (31) 〈硬さ〉→〈意志・気立て〉
こころ堅し、こころ柔らか
- (32) 〈重さ〉→〈思慮・気分〉
こころ重し、こころ軽し

さて、結びつく精神作用に着目すると、「むね」の属性について述べるものは内容物を前提とした広さの表現 (16) と清濁・善悪の表現 (24) のみであり、それぞれ度量、性分という意味に限られていた。これに対し、上の「こころ」表現では思慮という知的側面が加わっている。

「こころ」の知の側面に関連して、「あたま」との接点を窺わせる表現も存在する。後藤 (2018, 近刊) で示したように、「あたま」は回転する運動体に喩えられ、その回転 (速度) が思考 (力) と結び付けられるが (eg. 「あたまが回る」「あたまの回転が速い」)、(33) の通り、「こころ」でも相当表現が見られる。いずれの表現も現代では稀と考えられるが、中世以前に用例が確認され、「あたま」が知的精神との結びつきを得る近世末 (後藤 近刊) に先立って「こころ」が知的精神の座であったことを示唆するものである。

- (33) 〈運動・速度〉→〈気早さ・機転・思考力〉
こころを回す、こころ進む、こころ後る、こころ疾し、こころ早し、こころ鈍し

さらに、以下は「はら」のメタファーと類似する表現である。ただし、「はら」の場合「立」の状態は怒りと結びつくが、「こころ」の場合、精神を奮い起こすことを表す。

- (34) 〈位置・姿勢〉→〈奮起・覚悟・決心〉
こころ起こる、こころを立つ、こころが坐る、こころが居る

最後に、「こころ」を「糸」に喩えた表現を挙げておく。

- (35) 〈結・解〉→〈乱心 (の解消)〉
こころの糸、こころ結ばる、こころ緩ぶ

4.5 「所有物」としての「こころ」

後藤 (2017) は、Niemeier (2000) が the heart as an OBJECT OF VALUE (価値あるものとしての heart) と呼ぶ文化モデルと類似するメタファー的理解が、日本語の「こころ」に見られることを指摘している。この理解様式では、「こころ」は主体にとって貴重な「所有物」とであるとみなされ、表現の多くは「こころ」が主

¹⁷ 鷺見 (2010) も、「こころが軽い」の動機づけとして、「軽いものは動きやすい」「悩みやストレスがなければ動きやすい」という経験基盤の存在を考慮しているが、この際、悩みやストレスが「容器」としての「こころ」の中にあると分析している。

体を離れてやり取りされる様子を描く (cf. 「身体とは別個の物体」(鷺見 2010))。無論、「所有物」としての「こころ」は 4.4 節で扱った表現と同じく「具象物」であり、その下位メタファーとして位置付けられるが、本節で扱う表現は所有者としての主体の存在を強く意識したものである (以下に挙げる表現の大半がヲ格による他動的な事象を表すことに注目されたい¹⁸)。

(36) 〈所持〉→〈自覚〉

こころを持つ

(37) 〈交換〉→〈改心〉

こころを入れ替える

「所有物」メタファーによって主に焦点化されるのは、ヒトの対人的・社会的営みに関わる二種類の精神作用であり、一つは他への興味・関心を示すもの、もう一つは注意・配慮である。このメタファーは、次のような対応関係を前提としている。

(38) 「所有物」—「こころ (意識)」

「所有者」—「主体」

「所有物の位置」—「意識 (興味・関心・注意・配慮) が向けられる対象」

「所有物との距離」—「意識 (興味・関心・注意・配慮) の度合い」

「所有権」—「意識 (興味・関心・注意・配慮) の制御権」

「こころ」が所有者である主体のもとにある通常状態では、自覚 (consciousness) が保たれているが、それが (39) のように離れることで、意識が主体から別の対象へと移っていく。意識の移り先が明確な場合、そのもとへ「こころ」を「向け」て「寄せ」、さらに「留める」ことができ、また、所有権を放棄して「委ねる」ことができる (40)。また、「こころ」は他人によって「引かれる」こともあり、主体の自制が効かないほどの強い興味・関心の場合、「こころ」は他人に「奪われ」、所有権が移るものとして解釈される (41)。

(39) 〈分離〉→〈自覚〉

こころここに在らず、こころあくがる

(40) 〈接近・献上〉→〈興味・関心・注意・配慮〉

こころを向ける、こころを寄す、こころを渡す、こころを致す、こころを遣る、こころ及ぶ、こころを留める、こころを委ねる、こころを配る

(41) 〈誘引・奪取〉→〈興味・関心〉

こころを引く、こころを奪う、こころを取られる

一方、注意・配慮に関する表現では、「所有物」としての「こころ」を他者のために消費・使用するメタファーも観察される。

(42) 〈消費・使用〉→〈注意・配慮〉

こころを尽くす、こころを費やす、こころを使う、こころを用いる

こうした「所有物」としての「こころ」のメタファーは、関連表現として「きもを奪う」(恐怖) が認められるが、その他の身体部位では見出し難い「こころ」特有の理解様式であると考えられる。「はら」「むね」「あたま」などの語は身体部位を第一義としており、身体のもとを離れるといった描写とは結びつきにくい。もっとも、例えば「むね」は「はり裂け」たり「騒い」だりするが、それはあくまで主体の一部としてのことであろう。ヲ格による表現「むねを冷やす」などについても、身体部位を客観視していると考え

¹⁸ 友繁有輝氏より、ガ格・ヲ格の使用と事象の意志性 (volitionality) との関連性についてご指摘いただいた。友繁氏とのご指摘通り、「ヲ格」による表現は主体の意志を伴う精神作用を基本とし (eg. 「こころを配る」)、一方の「ガ格」による表現は主体の意志とは無関係に生じる感情を表す場合が多いと考えられる (eg. 「むねがはり裂ける」)。ただし、「こころが弾む」「こころを弾ませる」の両方が可能であるように、実際には無意識的に生じる感情であっても使役化が可能であることから、格助詞のみでの意志性の判断は困難と考えられる。また、「こころを刺す」などの表現の主語としては、「こころを配る」とは異なり、感情の誘因に当たるものが来る (eg. 「彼の何気ない一言が私のこころを刺した」)。

られるが、主体のもとを離れていくという認識までには至らない¹⁹。広い視野で見た場合、「所有物」としての「こころ」のメタファーは、「身体」と「精神」という二項対立のもとで捉えられる場合が多いと考えられる。すなわち、文学作品においても頻繁に描かれるように、相手との出会いが叶えられない状況下で唯一可能なのが、「こころ」を己のもとから離し、相手のもとへ遣るという選択肢であり、ここでは物理的実体としての身体を基準とした主体と精神としての「こころ」が明確に区別されている。(43) の表現を含め、「所有物」メタファーが構築する「こころ」の特性は、(特に対人的・社会的文脈における) 身体に相対するヒトの精神であると考えられる。

- (43) 〈交流〉→〈相思〉
こころを通わす、こころ交わす、こころを繋ぐ

5 観察のまとめと議論

「こころ」の比喩表現について、「むね」との比較結果一覧を[表 3]の通りまとめる。ここでは、先行研究において起点領域に位置づけられていた「こころ」「むね」の喩えとなる事柄を「ソース」とし、「こころ」「むね」の表現全体によって表される精神作用をターゲットとした。また、「むね」以外の身体部位との接点を窺わせる事例については、本文中で挙げられなかったものも含め備考欄に例を示した(ただし、意味の相違が明らかなものについては、* でマークした)。

表の示す通り、「こころ」の理解の背景に身体部位(心臓)としての意識が存在することは、隣接関係にある「むね」との互換性から明らかであろう。今回の調査では、「こころ」は後藤(近刊)で示した胸部の生理感覚・反応を「むね」と共有していることが明らかになった。身体部位としての「こころ」と「むね」を見た場合、「こころ」は「むね」の中に存在する臓器であり、包含関係にあるにもかかわらず、両者が動悸のみならず、その他全ての経験を共有していることは注目に値する。この点において、「こころ」はもはや心臓としての意味に止まるものではない。宮地(1979: 93)が上代の「こころ」について、「一般には、喜怒哀愁につけて動悸したり痛んだりするムネのあたりやその働きが漠然とココロであると思われていたのかもしれない」と述べるように、「こころ」の意味ははじめに指示対象としての心臓ありきで成立した訳ではないかもしれない。立ち返って、「こころ」と「むね」は、「容器」としてのメタファーにおいても明確な共通性が確認されることを見た。ただし、「むね」表現のうち、閉塞感に由来するメタファー表現や、感情を表す一部の容器メタファー表現では、「こころ」では相当する候補が存在しない(あるいは使用が稀な)ものも見られた。

一方、内容物を介さず、「こころ」を精神と直接対応づけた「具象物」としてのメタファーは、「むね」と対応する表現が少ない。しかし、その中には「こころ」と他の身体部位(外的部位「はら」「あたま」や内臓「きも」との互換性を窺わせる表現が含まれる。これは、「こころ」が精神の中核として、「むね」のみならず身体の各部位が担う精神作用と結びついていることを示唆している。

最後に、「所有物」としての「こころ」のメタファーは、「むね」を含むその他の身体部位では見出しにくい「こころ」特有のものであることを見た。冒頭で述べたように、「こころ」はヒトの非物理的な活動を司り、肉体とは区別される存在の代表である。「所有物」メタファーはこうした「こころ」の特徴を利用した理解様式であると考えられ、「こころ」は主体(肉体)から離れ、他者のもとへ届く存在として解釈されている。この場合、「こころ」は具象物でありながらも、身体に「対する」存在として描かれている。3節で見たように、早期の段階で精神的な意味を確立し、代表語で有り続けてきた「こころ」であるが故に可能なメタファー表現ではないだろうか。

¹⁹ 相撲などで上の者が下の者に稽古をつけることを表す表現として、「むねを貸す」「むねを借りる」がある。これらは一見「所有物」のメタファー表現例にも見えるが、実際の身体的接触(ぶつかり稽古)に由来すると考えられるので、上の「こころ」表現とは成り立ちが異なる。ただし、『日本国語大辞典 第二版』では前者に限り、他人に助言・助力をすることを表す用例も挙げられており、こちらが上のような稽古の文脈からシネクドキとして派生した表現なのか、それとも別の動機によるものなのか現時点では考察が及んでいない。今後の考察課題としたい。

	ソース	ターゲット	互換性	通し番号	備考
感覚・反応	痛み・刺激	悲しみ	こころ むね	(7)	*「きもが潰れる」 「きもを（焼く／冷やす）」
	閉塞（感）・圧迫・破裂	悲しみ・不安・感情の高ぶり（感動）		(8)	
	動悸・動揺	期待・不安		(9)	
	体温変化・燃焼	苦悶・恋慕・恐怖		(10)	
	不快感	嫌悪		(11)	
容器 (空間・場)	内部	本心	こころ むね	(13)	*「はらのうち」
	内容物	考え・意図		(14)	*「はらにある」
	取り込み	理解・納得		(15)	*「{はら／ふ}に落ちる」
	広さ	度量		(16)	*「はらに納める」
	収容	本心を隠す		(17)	
	開放	本心の公開・感情の解消		(18)	
	計算	考え・意図		(19)	
	天候	不安（の解消）		(20)	「あたまに浮かぶ」
	銘記・浮上	記憶（の想起）		(21)	
	一杯・膨張	感情の高ぶり・期待		(22)	*「はらが脹らむ」
	沸騰	怒り	むね	(23)	「{はら／はらわた}が煮える」
具象物	清濁・善悪	性分	こころ	(24)	「はらが汚い」
	固定・決定	覚悟・決心	むね	(25)	「{はら／きも}を据える」
	存在	精神全般（知・情・意）	こころ	(26)	「{はら／きも}が太い」 「はらを固める」
	量	思慮・注意		(28)	
	長さ	忍耐力		(29)	
	幅	胆力（不安）		(30)	
	硬さ	意志・気立て		(31)	「あたまが回る」 *「はらが立つ」「はらが居る」
	重さ	思慮・気分		(32)	
	運動・速度	気早さ・機転・思考力		(33)	
	位置・姿勢	奮起・覚悟・決心		(34)	
	結・解	乱心（の解消）		(35)	
所有物	所持	自覚	こころ	(36)	*「きもを奪う」
	交換	改心		(37)	
	分離	自覚		(39)	
	接近・献上	興味・関心・注意・配慮		(40)	
	誘引・奪取	興味・関心		(41)	
	消費・使用	注意・配慮		(42)	
	交流	相思		(43)	

表 3. 精神作用を表す「こころ」と「むね」の比喩表現の比較

6 結論

本稿では、日本語の「こころ」の比喩的理解について、身体部位としての歴史的背景を念頭に置いた調査・分析を行った。表現の観察においては、先行研究で「こころ」との互換性が指摘されている「むね」

を比較対象とし、また、その他の部位との関係についても触れた。2 節で定めたリサーチ・クエスションに対し、次のように結論づける。

- 「こころ」と「むね」は、隣接関係にある身体部位として生理感覚・反応（痛み・閉塞感・動悸・体温変化・不快感）を共有し、これらの経験は両者が精神との結びつきを得る身体基盤として機能している。また、「こころ」と「むね」は「容器」のメタファーを共有し、表現形式・意味ともに類似している。
- 「具象物」メタファーでは、「むね」との互換性を持たない「こころ」の表現が多い。しかし、その中には「はら」「あたま」「きも」といったその他の部位との互換性を持つ表現が含まれ、「こころ」は「むね」に限らず広範囲の部位との接点を有している。
- 「所有物」メタファーは、他の部位では見出し難い「こころ」特有の理解様式である。このメタファーは、身体に対する精神としての「こころ」の特性を際立たせたものと考えられ、身体部位としての「こころ」の認識が最も薄れた種のものである。

本稿では、「こころ」と「むね」の間で明確な類似性が確認された反面、一部の表現で「むね」の使用が一般的なものも観察された。今後は、辞書見出しのみならずコーパスデータ等に基づいた調査を実施することで、各々の語がどのような種類の語と結びつきやすいのか、使用レベルでの「こころ」と「むね」の相違を明らかにしていきたい。また、上で「こころ」特有と結論づけた「所有物」メタファーには、「気」との互換性を示唆する表現が存在する（e.g. 「こころを配る」「気を配る」「こころを遣う」「気を遣う」）。中国語（中国医学）の「気 (qi)」の影響を考慮に入れつつ、再検討していく。

7 参考文献等

<参考文献>

- 後藤秀貴 (2015) 「「腹」と「胸」を参照した日本語の比喩表現とその特徴ー比喩的認知を生み出す身体基盤・文化基盤の観点からー」, 『日本言語学会第 151 回大会予稿集』, 40-45, 日本言語学会.
- 後藤秀貴 (2017) 「再び日本語の「胸」の理解をめぐるー英語との比較からー」, 『言語文化共同研究プロジェクト 2016 交差するレトリックー精神と身体、メタファーと認知ー』, 39-51, 大阪大学大学院言語文化研究科.
- Goto, Hideki (2017) “On the Understanding of *Hara*, *Kimo*, and *Harawata* in Japanese” 『日本認知言語学会論文集』, (17), 120-132, 日本認知言語学会.
- 後藤秀貴 (2018) 「日英語の頭部の理解をめぐるー理性・知性の座としての「頭」と headー」, 『言語文化共同研究プロジェクト 2017 レトリック、メタファー、ディスコース』, 29-42, 大阪大学大学院言語文化研究科.
- 後藤秀貴 (近刊) 「精神作用を表す身体部位詞の史的展開ー〈胸〉と〈頭〉を中心にー」, 『日本認知言語学会論文集』, (20), 日本認知言語学会.
- 方小簪 (2010) 「日本語と中国語における「心」の比較ー意味拡張、概念メタファーの観点からー」, 『比較文化研究』, (93), 197-207, 日本比較文化学会.
- Ikegami, Yoshihiko (2008) “The heart – What It Means to the Japanese Speakers” *Culture, Body, and Language: Conceptualizations of Internal Body Organs Across Cultures and Languages*, ed. by Farzad Sharifian, René Dirven, Ning Yu, and Susanne Niemeier, 169-189, Mouton de Gruyter: Berlin and New York.
- 池添博彦 (2013) 「万葉集の語彙について (2)」, 『帯広大谷短期大学紀要』, (50), 25-31, 帯広大谷短期大学.
- 板垣徹 (1988) 「万葉集における「心・情」の訓字ーその用字意識をめぐるー」, 『中央大学国文』, (31), 14-29, 中央大学国文学会.
- Johnson, Mark (1987) *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*, University of Chicago Press: Chicago.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980/2003) *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press: Chicago.

- Lakoff, George and Mark Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*, Basic Books: New York.
- 松井真人 (2016)「日本文化における「心」の概念メタファー」,『山形県立米沢女子短期大学紀要』, (52), 11–20, 山形県立米沢女子短期大学.
- 松浦光 (2017)「現代日本語における気象現象の概念化 ―概念メタファー理論によるアプローチ―」, 博士学位論文, 名古屋大学.
- 三浦國雄 (2006)『風水講義』, 文藝春秋.
- 三浦於菟 (1996)『東洋医学を知っていますか』, 新潮社.
- 宮地敦子 (1979)『身心語彙の史的研究』, 明治書院.
- Niemeier, Susanne (2000) “Straight from the Heart – Metonymic and Metaphorical Explorations” *Metaphor and Metonymy at the Crossroads: A Cognitive Perspective*, ed. by Antonio Barcelona, 195–213, Mouton de Gruyter: Berlin and New York.
- Occhi, Debra J. (2008) “How to Have a HEART in Japanese” *Culture, Body, and Language: Conceptualizations of Internal Body Organs Across Cultures and Languages*, ed. by Farzad Sharifian, René Dirven, Ning Yu, and Susanne Niemeier, 191–212, Mouton de Gruyter: Berlin and New York.
- 大島正二 (2006)『漢字伝来』, 岩波書店.
- 鷺見幸美 (2010)「日本語の歌詞に見る「心」の概念化」, 松下千雅子・エドワード・ヘイグ・杉村泰 (編著)『戯れのテクノロジー』, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科.
- 谷ロー美 (2003)『認知意味論の新展開―メタファーとメトニミー―』, 研究社.
- Yu, Ning (2008) “The Chinese Heart as the Central Faculty of Cognition” *Culture, Body, and Language: Conceptualizations of Internal Body Organs Across Cultures and Languages*, ed. by Farzad Sharifian, René Dirven, Ning Yu, and Susanne Niemeier, 131–168, Mouton de Gruyter: Berlin and New York.

<コーパス・辞書>

- 前田富祺 (監修) (2005)『日本語源大辞典』, 小学館.
- 増井金典 (2012)『日本語源広辞典 増補版』, ミネルヴァ書房.
- 源順 (撰) 京都大学文学部国語学国文学研究室 (編) (1968)『諸本集成倭名類聚抄 本文篇』, 臨川書店.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 (編) (2000–2002)『日本国語大辞典 第二版』, 小学館.
- 大野晋 (編) (2011)『古典基礎語辞典』, 角川学芸出版.
- 菅原是善 (著)・正宗敦夫 (編・校訂) (1978–1981)『類聚名義抄』, 風間書房.
- 橘忠兼 (撰)・正宗敦夫 (編) (1976)『伊呂波字類抄』, 風間書房.
- 筑波大学・国立国語研究所・Lago 言語研究所『NINJAL-LWP for TWC』 (<http://nlt.tsukuba.lagoinst.info>).
- 筑波大学・国立国語研究所・Lago 言語研究所 (2015)『NLT (NINJAL-LWP for TWC) ユーザマニュアル バージョン 1.30』 (http://nlt.tsukuba.lagoinst.info/site_media/pdf/NLT.manual.1.30.pdf).
- 山口佳紀 (編) (2008)『暮らしのことば新語源辞典』, 講談社.

<用例出典> (通し番号順)

- 山口佳紀・神野志隆光 (校注・訳) (1997)『新編日本古典文学全集 1 古事記』, 小学館.
- 小島憲之・木下正俊・東野治之 (校注・訳) (1994)『新編日本古典文学全集 6 万葉集 1』, 小学館.
- 小島憲之・木下正俊・東野治之 (校注・訳) (1995)『新編日本古典文学全集 8 万葉集 3』, 小学館.

【付録】『日本国語大辞典 第二版』 「こころ（心・情・意）」

「こころ」が上代から精神に関する意味を確立していたことは、すでに3節で見た通りである。ここでは、『日本国語大辞典 第二版』の語釈とその初出例を頼りに、「こころ」の意味の多くが上代の用例中で観察されることを確認しておきたい。以下は、『日本国語大辞典 第二版』の「こころ（心・情・意）」の見出しを抜粋したものである（JapanKnowledge Lib 上の書式を一部変更して使用²⁰）。用例が複数記載されているものについては、紙面の制約上初出例のみを引用し、それ以外は割愛した。また、語釈の太字は、それに対応する上代の用例が記載されていることを意味する。

人間の理知的、情意的な精神機能をつかさどる器官、また、その働き。「からだ」や「もの」と対立する概念として用いられ、また、比喩的に、いろいろな事物の、人間の心に相当するものにも用いられる。精神。魂。

【一】人間の精神活動を総合していう。

(1)人間の理性、知識、感情、意志など、あらゆる精神活動のもとになるもの。また、そうした精神活動の総称。

*古事記〔712〕下・歌謡「大君の 許許呂（ココロ）をゆらみ 臣（おみ）の子の 八重の柴垣 入り立たずあり」

(2)表面からはわからない本当の気持。精神・気持のありのままの状態。本心。

*古事記〔712〕上「然らば汝（いまし）の心の清く明きは何（いかに）して知らむ」

(3)先天的、または習慣的にそなわっている精神活動の傾向。性格。性分。気立て。

*万葉集〔8C後〕一二・二九八三「高麗剣（こまつるぎ）己（わ）が景述（こころ）からよそのみにつつや君を恋ひ渡りなむ〈作者未詳〉」

(4)人知れず考えや感情などを抱くところ。心の中。内心。

*霊異記〔810～824〕下・八「猶、願を果さむと、睽（かへり）みて常に懷（こころ）に愁ふ〈真福寺本訓釈 懷 心也〉」

【二】人間の精神活動のうち、知・情・意のいずれかの方面を特にとり出していう。

(1)物事を秩序だてて考え、行動を決定する精神活動。思慮分別。また、細かなところまで行きとどいた気の配り。周到的配慮。

*万葉集〔8C後〕一四・三四六三「ま遠くの野にも逢はなむ己許呂（ココロ）なく里のみ中に逢へる背なかも〈東歌〉」

(2)とっさの気の配り。また、事に臨んで物事を処理してゆく能力。機転。気働き。臨機応変の心。

*枕草子〔10C終〕八三・かへる年の二月廿日よ日「さらば、かくなんと聞えよと侍りしかども、よも起きさせ給はじとてふし侍りにきと語る。心もなの事や、と聞く程に」

(3)自分の気持と異なったものを受け入れるときの精神的許容性。度量。

*源氏物語〔1001～104頃〕夕顔「我がいとよく思ひ寄りぬべかりし事を、譲り聞えて、心広さよ」

(4)感情、気分など、外界の条件などに反応して心理内で微妙にゆれ動くもの。情緒。

*万葉集〔8C後〕二・一四四「磐代の野中に立てる結び松情（こころ）も解けずいにしへ思ほゆ〈長奥麻呂〉」

(5)他に対する思いやり。他人に対して暖かく反応する気持。情け。人情味。情愛。

*万葉集〔8C後〕一・一八「三輪山をしかも隠すか雲だにも情（こころ）有らなも隠さふべしや〈額田王〉」

(6)詩歌、文学、芸術、情趣、もののあわれなどを理解し、それを生み出すことのできる感性。風流心。

²⁰ “こころ（心・情・意）”『日本国語大辞典 第二版』. JapanKnowledge Lib, <http://japanknowledge.com>, (参照 2020/03/20) .

＊大和物語〔947～957頃〕一四四「この在次君〈略〉心ある者にて、人の国のあはれに心細き所々にては歌よみて書きつけなどしける」

(7)ことばの発想のもとになる、人間の意識や感情。言語表現を支える精神活動。

＊古事記〔712〕序「上古の時、言（ことば）意（こころ）、並びに朴（すなほ）にして、文を敷き句を構ふること、字に於きて即ち難し。已に訓に因りて述べたるは詞（ことば）心に逮ばず」

(8)ある物事を意図し、その実現を望む気持。考え企てること。また、その考え。企て。意向。意志。

＊万葉集〔8C後〕三・四八一「結びてし言（こと）は果さず思へりし心は遂げず〈高橋朝臣〉」

(9)気持の持ち方。心構え。また、意図を実現させるのに必要な意気込みや精神力。

＊源氏物語〔1001～14頃〕若菜下「心によりなん、人はともかくもある」

(10)構えて、そういう気持になること。わざと、そのものとは違った見立てをすること。つもり。

＊浄瑠璃・夕霧阿波鳴渡〔1712頃〕上「これかかまだ蓬萊はかざらね共、先正月の心三ばうかざってもっておじゃ」

(11)あらかじめ事の成りゆきを想定または予定しておくこと。また、その予想。予期。想像。覚悟。常識的想定。

＊枕草子〔10C終〕三一九・この草子、目に見え心に思ふ事を「よう隠し置きたりと思ひしを、心よりほかここそ漏り出でにけれ」

〔三〕人間にある特定の分野に関わりの深い精神活動を特にとり出していう。

(1)相手に逆らうような気持をひそかに抱くこと、また、その気持。相手に反逆したり、分け隔てをするような気持。水くさい心。二心。異（こと）心。あだし心。隔意。

＊万葉集〔8C後〕四・五三八「人言を繁みこちたみ逢はざりき心あるごとな思ひ吾が背子〈高田女王〉」

(2)宗教の方面に進んでいる気持。道心。宗教心。信仰心。信心。

＊枕草子〔10C終〕一二〇・正月に寺にこもりたるは「などて、この月ごろ詣でで過しつらんと、まづ心もおこる」

(3)世俗的なものに執着する気持。迷いのままで悟れない心。雑念。妄念。我執。煩惱。俗情。

＊ささめごと〔1463～64頃〕下「ひとへに放埒を先として、身を軽くなす歌人世に多し。心を捨てたる人にまぎれ侍るべし」